

みんなが海へ行ってから、しばらくたった。

僕は一人で倉庫の掃除をしていた。

開け放した窓から、夏らしい風が入ってくる。合宿棟の裏手は林になっていて、枝が揺れるたびに涼しい空気が室内へ流れ込んできた。

(……海なんて、行けるわけないしな)

泳げないわけじゃない。ただ、水着になりたくなかった。

理由はカントボーイだから。体のことを人に見られるのが怖かった。だから海には行かず、留守番をしていた。

「……静かだな」

誰に言うわけでもなく、つぶやいた。林の奥で鳥が一声鳴いて、また静かになった。

(一人でいる方が楽なのに、一人でいると寂しい気

もする。なんなんだろう)

棚を掃除していると、一番上に手が届かなかった。踏み台になりそうなものを探し、椅子を棚の前まで持ってきた。

遠くから海の水が聞こえる気がしたけれど、気のせいだろう。

だって、今、合宿棟には誰もいないはずだからだ。

「いおり」

声がした。

びくっとして振り返ろうとしたら、椅子の上でバランスを崩しかけた。あわてて棚の縁を掴む。心臓が跳ねていた。

「……三希先輩？」

振り返ると、部屋の入り口に三希先輩が立っていた。

サークルの二つ上の先輩で、いつも飄々としていて、笑うとどこか余裕があって、でも決して近づきすぎてこない。同期の男たちにも女の子たちにも好かれていて、普段から先輩たちのまとめ役のような立ち位置にいて、今回の合宿でも自然とみんなの中心にいた。

(どうして、ここに……)

合宿に来てからも、三希先輩のそういうところは変わらなかった。バーベキューの準備でも、先輩が声をかけるだけでみんなが自然と動きだして、誰もが先輩の側にいたがるような、そういう雰囲気を持っている。悪い人じゃない、とは思う。

ただ、距離感がどうにも読めなかった。話しかけてくるタイミングが、いつも少し予想と外れる。他の人には絶対に言わないようなことを、さりりと言ってくる。笑顔でいるのに、目が笑っていないことがある。そういうところが、少し苦手だった。

だからこそ、今ここにいるのが不思議だった。み

んなに囲まれていた方が似合うのに、どうして。

「……海に行ったんじゃないんですか……」

「先に戻ってきたんだよ」

「ど、どうして……」

「おまえが来てなかったから」

「え……？」

「それよりいおり。そこから降りなよ。危ないから」

「あ、はい……っ」

三希先輩が近づいてきた。大きな手が僕の腰に触れて、降りるのを手伝ってくれた。

体温が高かった。先輩は僕を床に降ろすと、椅子を片手で脇へ寄せた。それでも腰に触れた手は離さない。近い。こんなに近くで三希先輩の顔を見たことがなかったから、なんだか息が詰まった。

「あ、あの、手を……」

「いおり」

「え、な、なんですか……？」

「手伝ったお礼にさ、おまえのおまんこが見たいんだけど」

「えっ……」

時間が止まった気がした。三希先輩の顔を見た。真顔だった。冗談を言っているような顔をしていなかった。普通の会話をしているみたいな、落ち着いた目で僕を見ていた。

「……え、今、なんて」

「おまえのおまんこが見たいって言った」

もう一回言った。全く同じ言葉を、全く同じ口調で。サークルの人気者が、後輩の男に向かって、こんな言葉をこんなに真顔で言う。そんなことがあるのだろうか。頭が完全に止まっていた。何を言われたかはわかっている。

ただ……どうして、この人が。

(知って……る？ どうして……？ 誰にも言ってい

ないのに)

「昨日、見ちゃったんだよ。風呂場でさ」

(昨日のお風呂で……)

「カントボーイなんだな、いおりは」

「……」

「だから、おまんこ見せてよ」

考えたくなかった。でも三希先輩の目はまっすぐで、揺らいでいなかった。本気で言っているということだけはわかった。

「……そ……そんなこと、急に言われても……」

「急じゃないよ。ずっと思ってたから」

「ずっとって……」

「裸、見たいなって。だから、おまえのおまんこ見せて」

三希先輩はそう言って、僕の前にしゃがんだ。手が僕のズボンの裾をそっと掴んで、持ち上げようとしてくる。

「ちょ……っ！三希先輩、何してるんですか……っ！」

「おまんこ、見るからさ」

「見るじゃないです、だめですから……っ！」

（やだやだやだ……っ。先輩が……こんな……っ！）

逃げようとしたけれど三希先輩の手が僕の太ももを掴んでいた。後ろは柵があって下がれない。

「三希先輩、本当に、やめてください……っ」

「ちょっとだけ。最初は見ただけだから♡」

最初は、という言葉の意味をうまく理解できないうちに、先輩の指がズボンの内側に入ってきた。太ももの内側を確かめるみたいにゆっくりと撫でる。

「ひっ……」

柵の縁を掴んだ。三希先輩の手が内もものに触れるだけで、なんだかゾクゾクして力が抜ける。